
涙華

しかはや緒

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

涙華

【Nコード】

N6355W

【作者名】

しかはや緒

【あらすじ】

これは、ある小さな物語。

黒髪をもつエリシアは、その髪色ゆえ人々に忌み嫌われていた。そして、重なり合うように同じとりに生まれた 龍が統べる国の王子は、慶喜の証である白髪を生まれ持った者として人々に愛されていた。

白の少年に力という力はない。しかし黒の少女には、「死」を見る力があつた……。

二人が出会うとき、運命の歯車は廻りはじめる。

序

灰色の雲。其れに輪をかけたように、黒い空。サイヴェリアでは珍しい、いや、決してない光景が、目の前には広がっていた。

フェイフュー の風は、冷たい。肌を空気が噛んでいるような、そんな錯覚に陥るほどだ。寒暖の差が激しい此の地で、今は特に厳しい寒さに在るときだ。

「何て間の悪い」

舌打ちしたい気持ちで、そう呟くと、少年は脇に携えてある剣の柄を握り込んだ。

いや、少年というのは、正しくはないのかも知れない。何しろ、人ではないのだから。

ローブのフードを深くかぶり、寒さを凌ごうとするが、やはり無理だ。寒いものは寒い。悴んで、思うように動かない手に、己の息を吐くと、僅かだが温かくなった。

道がぬかるみ、滑りやすくなっている。

足を取られながらも、少年は走っていた。雲の隙間から垣間見えた、細い月の光に当てられ、淡く光る短い銀の髪が風で揺れる。其れと同じく、少年の瞳もまた銀だった。鋭いその瞳は、だが、何処

かにあどけない幼さを残していた。

厳しく引き締まった頬は、瘦けたと言えるほど肉が落ちている。腕には無駄のない筋肉があり、だが、足取りは怪しい。

風でロープがはためく。

昨晩の雨で水分を吸い、すっかり重くなってしまったロープは、乾かないままだ。食料も、水も十分に持っていない、しかも体力も落ちてきている少年にとっては、お荷物だ。捨ててしまおうと思っただことは、幾度もある。

だが、その度にあの声が、彼の耳元で聞こえる……。

……ロープだけは捨ててはいけない。水を吸って重くなってしまい、邪魔になろうとも。ロープがなければ、フェイフューの寒さは凌げない……

少年は、唇を噛みしめた。口の中で、鉄の味がする。口はもう、乾ききつてからからだだった。唾液も出ていない。腰に掛かっている革袋の中をのぞき込んでみるが、もう水はない。

ため息とも、諦めともつくものを吐き出し、少年は足を止めた。そのまま、木にもたれかかって腰を下ろしてしまった。虚ろな瞳で、空を見上げる。

閉ざされた瞳で何を捜しているの？

まだ、耳に残っている声。其れは、死と生、どちらへの誘いか。耳の奥で響いている、その優しい声は。

腕を持ち上げてみる。痺れて、感覚が無かった。

自分は死ぬのか。こんな、寒空の下で。生まれ故郷とは似てもに
つかぬ貧相な土地で……。

サイヴィレアに、もう一度帰りたい。温かな、彼の土地へ……。その強い思いが、少年の胸を強く打った。思いが、少年の頭の中を駆けめぐる。

帰ろう、サイヴィレアに。

戻ろう、彼の土地へ。

必ずや、懐かしい彼の土地へ。

たとえ、身体が朽ち果てようと、何とも知れぬ、魂だけになろうと。

帰ろう。

「帰ろう……………」

「

少年は、そう小さく呟くと、ゆっくりと瞼を閉じた。銀の光が見えなくなる。

月の光が、少年を冷たく照らしていた。

序（後書き）

2011/11/4 改訂

光が、棒になって射し込んでくる。

そのあまりの眩しさに、少女は目を細めた。

青い空、白い雲。

そして眩しいほどの太陽。

それなのにも関わらず、白く光るものが宙を舞っていた。

目の端をちらり、ちらりと横切っていく。

掌を広げ、ふわりと優しく其れを包み込む。

手には、ひんやりとした冷たさだけが残って、消えた。

「雪……」

少女は薄く笑うと、とけて無くなった後の掌を見つめて、もう一度確かめるように拳をにぎる。

浮かんだ笑みは、慈愛に満ちたものだった。

立花の白に、彼女の髪色はよく映える。

此の村では珍しい其の髪の色は、村人に忌み嫌われていた。

艶やかに白磁の肌をすべる漆黒の髪。

魔とされるエイワズ（月）を呼び込む黒髪は、彼らを畏怖させるには十分すぎた。

そう、黒を身に持つ者は、身体にエイワズを憑かせているのと同じことなのだ。

その不吉な色を持ってうまれた不幸な少女の名を、エレシアと言った。

海の碧よりも深く、空の蒼より澄み切ったその瞳は穏やかな光をたたえている。

「もう冬ね……」

人肌が恋しくなる季節。町では冬至の祭りが開かれ、人々は神に来年の豊作の祈りを捧げる。寒さに縮こまるわけでもなく陽気に活気づく人々を見ているのが、エレシアは好きだった。

けれどエレシアは、ここ、ヘレテーペの湖で一人さびしく過ごすなければならぬ。

レイワズは、人と交わってはいけないから。

町の人々は決して悪い人たちではなかった。けれどその髪色を忌み嫌い、恐れている。

エレシアを忌む理由は、それだけではないのかもしれない。

エレシアには、人の「死」をみる力があつた。

死が近づいている人に触れれば、みてしまふ。
息絶える、その瞬間を。

子供の頃は、そこまでひどくはなかつた。
けれどなぜか、大人になっていくほどにその力は強まっていき、
今では脳裏に焼きつくほどはつきりと見ることが出来てしまふ。

「こんな力を、何故神様はわたしにお与えになつたのかしら……」

それは意味のあることなのだろうか。

考えても、分からない。分かるはずがないのだ。

思惟にふけつていると、足元に何かふわふわしたものが触れた。

驚いて足元を見ると、灰色狼が足元に擦り寄ってきていた。

「なあに、ウエル。元気づけてくれるの？」

鋭いまなざしをどこか和ませながら、ウエルと呼ばれた灰色狼は
ひとつ大きなあくびをした。

剛毛でもなく、かといってやわらかすぎて絡まりもしないさらさらとしたウエルの毛並みがエレシアは気に入っていた。まだ幼くて町に住んでいたころ、人々の視線が嫌でたまらなくて一人で森に逃げ出したことを思い出す。

むしゃくしゃに走り回って森で迷ってしまい、帰り道も分からずに泣き出してしまったとき、ウエルに出会つたのだ。

金色の瞳があまりにも綺麗で、今にも言葉を話すのではないかと
思ったほどだった。静かにこちらを見つめるその姿には町の人々の
ようにエレシアをはね付けるものは微塵もなく、安心しきってウエ
ルの毛並みに顔を押し付けて大泣きしてしまったのだ。不思議と、
その灰色狼に襲われる、という恐怖感はなかった。

泣き疲れて寝てしまったのか、その後はよく覚えていない。ただ
感じたのは、頬に触れるさらさらとした毛並みと、暖かさと、心地
よく優しい揺れ。気づいたときには村の広場の原っぱでうつぶせに
なって寝ていた。

それからよく森に行き、ウエルによく会いに行った。何をせずと
もよかったのだ。ただ、傍らに居ることさえできるのなら。

村を出た今も、ウエルと過ごすことがほとんどだ。心のよりど
こで、彼女の唯一の支え。今でも落ち着いた金色の瞳を見ると、何
か語りだすのではないかと思ってしまう。

人の言葉を話す獣【ソツァン】を見たことはないが、噂に聞いた
ことはある。

東の果て　　竜の統べる国には、そういったものたちがいる
と。

それは町にいた頃、吟遊詩人から聞いた詩^{ウタ}だった。

『ここより東の国　　神秘のヴェールに包まれた竜が統べる
国のモノガタリを語りましょう。』
とは言っても、あの御伽噺に出てくるドラゴンが本当に国を治め
ているわけではありません。
竜の子孫すえとされる、　竜と人との混じり子【リウテール】　が王
となり玉冠をいただいているのです。

まだ竜と人とが共に大地を生きていた頃、人は竜の
使役下にありました。

国はたった一つだけしか存在しなく、王もまた一人でありました。
否、この場合、一人と言うのは正しくありません。

なぜなら王は竜であり、彼は　偉大な翼をもつ主【ティザルダ】
と呼ばれていたからです。

彼は、孤独でありました。

太古の昔、竜は魔を操ったといわれています。

その強大な力ゆえ、みな彼を恐れて真心を開くことはありません
でした。

竜は人よりも遥かに長寿。

【ティザルダ】であった彼はなおのことでありましょう。

長い年月、人ではきつと耐え得ることが出来ないであろうその月
日を、彼は孤独の中で過ごしました。

ある日のことです、彼の侍女として人の娘が差し出
されました。

彼女は彼の目を見ることさえなく、一言も言葉を発しませんでし
た。

どうせこの娘もわたしを真実孤独から連れ出してはくれないのだ

……。彼はそうどこかあきらめました。

しかし、転機は訪れます。

彼が疲れて椅子でうとうととしていたとき。

彼女が不意に、彼を見て笑ったのです。

突然のことに彼は驚き、彼女は慌てて頭を下げ、無礼を詫言いました。

「ごめんなさい、ティザルダさまがあまりにも弟と似た仕草をされるものですから。」

そう言った彼女の愛しみ溢れる笑みに、彼は心奪われました。微笑みかけられたことなど、長い間なかったのです。

心の孤独が木漏れ日に溶かされたようになくなり、彼は 愛 というものを知ったのでありました。

拒絶されることが恐ろしいと思ったのも、ずっとそばにいてほしいと思ったのもすべて始めての感情で、彼は自分の気持ちをもてあましました。

彼女の拒絶が恐ろしかった彼は、魔で彼女と同じ存在を造ろうと考えました。

はじめに魔で出来たのは、獣のような耳を持つ人間【イティア】でした。

次に出来たのは、人の言葉を話すものの、全く獣の姿をした【ソツアン】でした。

そして最後に出来たのが、完璧な人の姿であったものの、竜の性質を濃く継いだ【ヘフェス】でした。

しかしどれも、彼女とは似ても似つきません。憤慨した彼は【ヘフェス】を切り殺してしまします。

その血をたまたま浴びた彼女は、重い病にかかってしまいました。彼は悔やみます。どうして魔で彼女と同じものを造ろうとしたのかと。彼女は唯一無二の存在で、ここにしか居はしないのに。

枕元で、彼は彼女にこういいました。わたしは愚かだった、気持ち言うことさえ恐れ、こうしてお前を病に貶めている。拒否はいくらでも受け取るう、ただ言わせてくれ。

お前を、愛している。

彼女は歓喜で涙を流しました。彼女も彼を慕っていたのです。そして言いました。

ええ、わたしもです。誰よりもあなたをお慕いしております。

その言葉に、彼も泣きました。心が震え、衝動のままに彼女を抱き寄せ、口付けました。竜の涙で病の穢れははらわれ、見る間に彼女は治っていきました。

そして彼は彼女を王妃に迎え、数年を経て 竜と人との混じり子【リウテール】 を授かります。

時が二人を分かつまで、彼らは幸せに過ごしました

』

そう語った吟遊詩人の声の調子や、細い指で弾くオールディンの音を今でも思い出すことが出来た。

幼心に、とても感動したのを覚えている。東の籠の統べる国とは、一体どんなところだろうか……。そう思い巡らせたこともあった。

なによりも、魔をつかう、と言つのが気になった。どこか既視感をおぼえる。

まるで自分のことのような。

東へ、行ってみたい。

強くそう思った。

1 (後書き)

2011/11/5 大幅改訂
主人公の名も変えました。

「おまちください、キリベルク様！」

「どうか、お供を一人だけでも！」

「御身を第一にお考えくださいませ！」

後ろから聞こえるそんな声など歯牙にもかけず、キリベルクと呼ばれた少年は厩への道を急いだ。

廊下に反響する自分の駆け足音がやけに大きく聞こえる。

城内にある森へ入ってしまったら目をくらませることが出来るかも知れないが、それでは遠回りになる。

今は一刻も早くここを抜け出したかった。

厩へ着き、少し息を整えてからおなじみの馬に乗る。

十歳の誕生日のとき、自分に宛がわれたものだ。

「頼むぞ、レイ」

それに答えるようにレイはいなくなると、颯爽と駆け出す。

その様子を認めたキリベルクの侍女たちは顔色を変えた。

「キリベルク様っ！」

衛兵、殿下をおとめして！！！」

そんな叫びも空しく、王への謁見のために開かれたはずの門は、王子の逃走のために使われた。

年に一度の、民が王への謁見を許される日。

そうと知っていて、キリベルクは今日を狙った。

唯一、無造作に門が開け放たれる日。

外からの突撃は無理かもしれないが、城内から逃走することは可能
なはずだ。

ウンジョー（太陽）。

それが生まれたときから自分を縛ってきた言葉だ。

マントを深くかぶり、キリベルクは唇をかんだ。

それが何だというのだ。

自分には不思議な力などない。

ただ容姿が人と少し違うからといって、特別扱いされる言われは
ないのだ。

（そんなものに縛られるのは、もう嫌だ）

皆の優しさはありがたい。

しかし、その思いに答えられるだけの何かを、自分は持っていない。

苦い思いをかみしめながら、林に入ろうとしたときだった。

「キリベルク」。いきなりの逃走はないんじゃないの」

間拔けたその声に、キリベルクは目を見開いた。慌てて逸る馬を抑える。

キリベルクの行く手を遮るようにたつ鹿毛の馬には、見慣れた男が乗っていた。

「シユム……」

苦虫を噛み潰したような顔で、キリベルクは赤毛の男の名を口にした。

一方のシユムと呼ばれた男は、気安い態度でひらひらと手を振る。

「何やってんのかな、こんなところで。お前が今いるべき場所はお城でしょ。早く戻んなさい」

おどけた態度だが、目が笑っていない。

鷹のような鋭い瞳は、キリベルクを射抜いていた。

「白髪がどんだけの意味を持つか、赤ん坊じゃないんだからお前だ

「って分かってるだろ。追っ手がかかったから、きつともうすぐジジも来るぜ」

うつむいて手綱を握り締めるキリベルクに、シユム　シユラ
トツイフェラ・スーリは馬を寄せる。

二十歳前半とおぼしきシユムの顔は精悍で、目元が涼しかった。無駄なく引き締まった身体はしなやかな野生の獣を髣髴とさせ、彼が並みの剣士でないことを窺わせる。

「追ってこないとも思ったわけ？ 仮にも俺はお前の側近だぜ？ お前の考えてることなんかお見通しだっつーの」

「……側近ではなく、監視だろ。同属殺しの【赤剣レイウエトのシユム】」

そう呟いたキリベルクの顔は、皮肉で歪んでいた。

「立派にあてこすれるじゃないか。威勢がないから、今日はもう参っちまったかと思っただぜ」

「口の利き方には気をつけるんだな、シユラトツイフェラ・スーリ。おれを誰だと思ってる」

「んー。そんなんじゃない俺を逆上させられないな。ウンジョーの王子様？」

こいつは、おれを怒らせることを面白がっている。そう分かったとたん、頭に血が上るのが自分でも分かった。

キリベルクは、憤りのままに唇を噛む。

薄く唇が切れて、血がにじむ。

主人の動揺を知ってか、レイが低く嘶いた。

「まあ、言い合いはこれまでにして、いったん城に帰るぞ。今日はお前の兄上様が【リウテール】かどうかの判別儀式もあるんだからな」

「おれに兄上のことは関係ない。兄上だっておれがいないほうがよっぽど……」

「本気で言ってるつもりなら、お前でも殴るぞ」

物騒な言葉とともに尋常ではない殺気を感じて、キリベルクは口をつぐんだ。

「ともかく城に戻れ、いいな」

頷くことも首を振ることも出来ずに、キリベルクはただうつむいた。

2 (後書き)

2011/11/5 大幅改訂

黙って俯いたキリベルクに目をむけ、シユムはふつと息を吐いた。

いつにも増して強情だ。

手綱を睨み付けるばかりで、うんともすんとも言わない。

けれど自分の非も認めているのか、シユムに楯突くことはなかった。

キリベルクが城を脱走したのはこれが初めてではない。

何か大きな催しがある時などはいつも城から姿が消えていた。

けれどそれもお遊びの範疇で、笑って済ませることだったのに。

(一体何があっただんだ……?)

年に一度の、民が王にまみえる日。

この日だけは、キリベルクも毎年大人しく謁見の間で控えていたのに、今年はどうしたことだろう。

いつも突拍子のないやつだとは思っていたが、今日のは何か少し歪んでずれている気がしてならない。

思惟にふけるうとしてしていると、声がかかった。

「シユム！！」
それにキリベルク殿下もご無事で」

どこか滑らかさが残るバリトン。

耳に心地よく、すり抜ける雄風のような声の持ち主は馬上で少し息を切らせていたが、キリベルクを認めると下馬して深く礼をした。

淡い金髪に少し影をまぜたようなストレートの長髪が、それにしがたがってこぼれ落ちる。

「お姿を拝顔し、安心いたしました。お一人で城を出られたと聞いたときには、どれほど肝がつぶれたか……。城へ戻りましょう」

よく見ると、金髪の彼の背後には二十ほどの兵が従っていた。きつと搜索に出した兵なのだろう。

皆一同にほつとしているのが見て取れた。

「よおジジ。思ったよりはやかっただな。お前は執務室に籠ってんのがお似合いなんだから、追って来なくてもよかったのによお」

のん気に笑うシユムを冷たくねめつけ、金髪の彼　　ジジはシユムの馬の腹を思い切り蹴った。

当然のごとく馬は暴れ、シユムは抑えつけるのに苦勞する羽目になった。

「まったく何すんだよ、この【書庫の亡霊野郎】が。何も馬にあたる

「ことねえだろ」

「お黙んなさい、筋肉馬鹿のくせに。それとそのあだ名で呼ぶのは止めると、何度言いました？きつとおつむの方も筋肉で侵されているのでしょね、ああ未恐ろしい」

中世的な風貌のジジと、野生的で精悍な顔つきのシユム。
何においても対照的なこの二人は、二人そろってキリベルクの側近だった。

幼い頃からキリベルクに付き従い、まるで兄弟のような間柄であったシユムとは違い、ジジはキリベルクが十二の時に勉強、作法、戦術などその他諸々を教えるために着いた教師であった。

そりが合わない二人は、会う度よく喧嘩している。

今も、主のキリベルクそっちのけで言い合っていた。

「大体あなたがキリベルク様のお側を離れていなければ、こんなことには……」

「こつちにだって用事ってモンがあんの。しかも誰よりも早くキリベルクを見つけただろ？お前こそ四六時中ついてればいいんじゃないの」

「今日の謁見のことで色々と準備があり、王と打ち合わせをしてくれたのです。しかも何ですかあなたは。またキリベルク様を呼び捨てにして。様をおつけなさいといったでしょう。これだから筋肉馬鹿は……」
「と、こんな馬鹿と言い合っている暇はありません」

急に現実まひみに引き戻されたかのように鎧あひみに足をかけ、ジジは一気に飛び乗った。

そしてキリベルクを促すように視線を向けた。

「何があつたのかは存じませんが、お話は城に帰ってから聞きます。まず一旦、城へ戻りましょう。あなたはどれだけ御身が稀有な存在か理解しておられない。白髪のウンジョーが姿を消したとなれば、国と国をも巻き込む問題にもなり得るのです。さあ、おはやく」

今度ばかりはキリベルクもしぶしぶながら頷いた。

拭いきれない胸の黒い何かを、どうすればいいかと持て余しながら

言葉を一言も発しないまま兵に前後左右を囲まれ、ジジの先導に従って駆けていったキリベルクを見て、シウムは彼の暗い表情を思い出した。

(白髪のウンジョー、か。確かに、子供一人に背負わせるには重過ぎる名かもしれねえな)

そしてシウムもまた、キリベルクたちの後を追って馬を走らせた。

竜の統べる国

リエスタ・トゥ・ルシの城へ向かって。

*** **

大陸最古にして最大の国土を誇る国 それが俗に竜の統べる
国と言われる リエスタ・トゥ・ルシ である。

国の多くが森林に囲まれ、他国との交易も活発でないことから、
神話の代より変わらず竜の守護を受けている、と噂されるほどに神
秘に包まれている国だ。

リエスタ国と略称されるこの国には、他国と比類ないほど数多く
の神話や伝承がある。
その一つに、【リウテール】の儀 の元になった パラミーヤ
の神託書 というものがあつた。

パラミーヤという偉大な託宣者についてつづられたその書の一節
にこうある。

リエスタの王族、二十になりぬれば竜の血の有無を明

瞭にするため、自らの血を 泉 にたらさん。それ輝きたるは、竜の血流るる証なり。偉大な翼をもつ主【ティザルダ】の子孫すえ、 竜と人との混じり子【リウテール】 であることまた然り。

この一文によってうまれたのが現在の 【リウテール】の儀 だ。

その儀式で認められた者にしか王位継承権は与えられない。これまで、王族で 泉 が輝かないものはいなかった。

そして今日、リエスタの第一王子クライスト・ヴァハ・リエスタ・トウ・ルシの 【リウテール】の儀 が控えていた。

* + * + * +

城へ戻ると、キリベルクはさっそくマントを脱ぎ、白髪を晒した。

何にも染まらない白。

老いた髪の白だとしても、ここまで人を魅了しないだろう。
雪よりも純潔で、何処までも白く輝いている。

厩から出るとき、ジジに気づかれないように来たから今は一人だ。
無性に、一人でいたかった。
きつとシユムは影からついて来ているだろうが。

無造作にマントを投げ捨てるキリベルクに、不意に悶達とした声
がかかった。

「キリベルク、戻ったのか」

誰の声か分かる。

だからキリベルクは顔を見ずとも身体を震わせた。口からもれる
声が、おのずとかたくなる。

「兄上……」

「お前は見つけやすくいいな。白髪ですぐ分かる。それなら悪戯
してもすぐばれてしまうぞ」

鷹揚な様子で歩み寄る兄 クライストは、柔らかな表情でそ
う言った。

自分とは違うブロンドの髪。

それから目をそらす様に、キリベルクはあらぬ方を見つめる。

「お前一人か？城内だからといって、一人歩きは危険だぞ。連れ戻
されたのなら、ジジかシユムが一緒かと思ったが ああ、シユ

ムはあそこにいるな」

兄の視線の先には何も見えなかったが、かすかに草の香りがする気がした。

「兄上こそお一人ですか。今日は大切な儀式があるというのに」

「わたしの心配より、自分の心配をしる。わたしは剣を持っているからな。しかし儀式か……。他人事に思えて仕方ない」

苦笑するクライストは、どこか自分自身を嘲ているようで胸が苦しくなった。

優しい兄、王位を継ぐべき人。この人が誰よりも好きなのに……。

「血をたらしめても 泉 が輝かなかつたら、とんだ笑いものだな。きつと空前絶後だぞ。王族の血が輝かない、なんてことになったら。そのときは頼んだ、キリベルク」

冗談のようにそう言うクライストの言葉が傷蒼感を煽る。

キリベルクは顔を歪めて、それでも微笑もうとした。

「冗談でも、そんなことは言ってほしくありません。大丈夫です、きつと 泉 は輝きます」

「そう願う。ではまた後で会おう。儀式があるから今年は謁見の間には行くことができないが、【リウテール】の儀 には王族全員が立ち会うことになっているからな。きちんと謁見の間へ行くんだぞ、キリベルク」

「はい、兄上」

ではな、と微笑んで西の党へ向かうクライストを見送る。

兄上は優しい方だ。疎ましい自分を気にかけてくれるほど。兄上にとって、白髪を持つ弟は邪魔でしかないのに。

誰よりも好きなあの方に、迷惑をかけたくない。

しかしそれには、自分自身の存在が邪魔だと言うことに、キリベルクは気づいていた。

『殿下、どうかお覚悟を』

『慶喜の白髪を持つキリベルク様が王位継承権を第一に持つべきなのです。クライスト王子などではなく』

『あのクライスト王子に何が出来るというのですか。ただの凡庸な人間です。殿下の方が、どれだけ王に相応しいか』

『あなた様が国王となれば、この国は神々に守られたも同じ。殿下は神々に愛された証の白髪を身に持っていますから……』

幾度となく繰り返される声。

フラッシュバックのように頭の中で何度も木霊す。

いやだ、うるさい。黙れ、黙ってくれ。

「おれに、そんな力なんて、ない。ないんだよ……」

やっと出たかすれた弦きは、長い廊下の奥へと消えていった。

4 (前書き)

途中で人称が変わります。ご注意ください。

何か悲しい声を聞いた。

寝ていたエレシアは、不意に目を開けた。

(何だろう、この感じ……。あの寂しそうな声は、誰のもの……。?)

ベットから降り、冬の寒さで冷たくなった床に足をつける。

足から氷のような冷気が伝わって、エレシアはぶるっと震えた。

靴を探しながら窓の外を見てみると、まだ日も昇りきっていない。

あの声に起こされて、もう一度眠れる気がしない。

仕方なく、仕度を済ませる事にした。

外に出ると、朝の冷気が肌を刺す。

雪は積もらなかったが、随分と霜が落ちていた。

息を吐くと白い。

かじかむ手に息をかけながら、まだ凍っていないであろうへレテ
ーペの湖へ向かった。

しゃりしゃりと霜を踏み、なるだけ靴がぬれないように歩く。

湖について、凍っていないことにほっとしながら桶に水を汲み、帰ろうとしたときだった。

「……なにかしら、これ」

よく見ると、霜の上に自分以外の足跡がある。
しかも森の奥へと続いている。

自分よりも足が小さい。
そしてある考えに至った。

「もしかして、子供？」

(たいへんだわ。森の中で迷って、凍え死にでもしたら……)

衝動に突き動かされ、エレシアは一旦桶をその場に置き、その足跡を追ってみることにした。

水で湿っているのを見ると、どうもまだ新しい。
無事でありますように、と祈りながら森の奥深くへと足を踏み入れる。

木々が視界を邪魔して、先までよく見通せない。
少し進んだときだった。

「あっ！！！！」

人影がある。

しかも、うつぶせに倒れているようだった。

エレシアは急いで駆け寄ると、その人影を抱え起こした。

「しっかりして！ねえ、寝てはダメ！……」

「っ！？」

しかしその顔を見た瞬間、エレシアは息を呑んだ。

自分より小さな身体。

明るい茶の髪。

ぐったりしたその人物は見るところ男の子のようだ。

が、決定的に普通とは違っていた。

彼には、獣のような耳があったのだ。

++*+*+*

(暖かい。それにいい香り。おいら、とうとう死んで天国にこれたのかな……?)

ぼんやりとした頭で、けれど体中の傷みを感じ取る。

(……まだ死んでない。じゃあ、ここはどこ?)

乾いて張り付き、痛む目を無理やりあけようとしながら、光を求めめる。

と、乾いた唇に生ぬるい何かを感じた。
ぱりぱりになった唇が潤っていく。

舌に妙な甘さを感じて、渴望するようにそれを飲み込んだ。

すぐにそれは水だと分かる。

飲みたいだけ飲むと、なんだか身体に熱がともったような気がした。

再び目を開けようとする。

今度は思ったよりすんなりあけることが出来た。

前に見えるのは、天井。

それに、黒髪の少女だった。

こちらに気づくと、ふわっと微笑んだ。

「気がついた？毒下しの薬湯を飲ませただけ。そんなに苦くなかったでしょう」

あれは薬湯だったのか。

水にしては妙に甘いとおもった。

頷きながら、かすれた声で問う。

「　　」

「国を聞いているなら、デアヒスト。この場所を聞いているなら、村のはずれの森の中にある、わたしの家よ」

デアヒスト……。
聞いたことがない国だ。

しかし、この少女には何か、不安な気持ちを癒すものがあつた。

優しい手が、額に触れる。

「もっと眠ったほうがいいわ。食事も用意してあるから、食べたいときに食べて」

「うん……。ありがとう」

その声に誘われるように、眠りに落ちた。

4 (後書き)

獣のような耳を持つ人間【イティア】の少年との出会い。

少年が次に目を覚ましたのは、丸一日後だった。

まだ重たい体を起こし、思いつきり背伸びをする。

節々がまだ痛んだが、前よりよほど体が軽くなったのを少年は感じた。

「あ、起きた？」

不意に声をかけられて驚き、少年は動きを止めてそちらに顔を向ける。

外から帰ってきたばかりなのか、エレシアはコートを羽織っていた。

「外は雪が積もっているの。あなた運がいいわ。倒れていたのが今日だったなら、本当に凍死していたかもしれない」

エレシアは手をさすりながら少年に微笑みかけ、すでに用意してあったスープを差し出した。

「どうぞ。軽いものなら食べられる？」

「……ありがとう」

そう礼を言っただけ少年はその器を受け取るつもりだったが、急にはっとしてエレシアから退いた。

頭を隠すようにして布団を被る。

忘れていた。自分は 外 では異形なのだということを。

今更遅い。

きつと彼女は自分の耳を見てしまっているだろう。

また、罵倒されるだろうか。罵られ、ひどい仕打ちをつけるのだろうか。

唇を噛み締めて耐える様に体を縮めていると、背中に手が触れるのが分かった。

驚いて思わず顔を上げる。

「大丈夫よ、何もしないわ。あなたがわたしに怯えるのは、もしかしてその耳のせい？」

落ち着いた声と、心地よい冷たい手。

少年は澄んだ泉より青いその瞳に見入った。

恐れが嘘のように払拭され、穏やかな気持ちになる。

「最初に見たときはわたしも驚いたけど。あなた、【イテティア】なのね」

偉大な翼をもつ主【ティザルダ】が自らの魔で創り出した、世界の営みの外にある存在。

エレシアもこうして会ってみるまで、【イテティア】とは物語の中だけの存在だと思っていた。

いや、本当にいたとしても、自分とは関わりのない世界だと思っていたのだ。

42

遙か思い寄せる、竜の統べる国。
そこにいる筈の【イテティア】が、真実自分と顔を見合わせて話をしているなんて。

「あなたは、おいらが気持ち悪くないのか……？」

恐る恐ると言ったように呟かれた言葉に、エレシアはふっと微笑んだ。

「いいえ。その反対よ。とても嬉しい、あなたに会えて」

少年は目を見開く。

人間に好意的な言葉をかけられるのは、初めてだったのだ。

なんともいえない感情が溢れるのが分かった。

少年が顔を赤くしたのに気づかず、エレシアは続ける。

「逆にわたしが聞きたいわ。あなたはわたしの髪色が恐ろしくないの?」

言われて初めて気づいたように、少年は改めてエレシアの髪を見た。

黒。魔のエイワズを呼び込む色。

しかし恐ろしくは感じない。

きつと彼女の色だからだ。

「珍しい髪色だと思う。だけど、恐ろしくはないよ。人々に穏やかな安らぎをもたらす、聖なる夜の色だ」

「ありがとう」

顔をほころばせて心の底から嬉しそうにエレシアは笑った。
綺麗な笑顔だ、と少年は思う。

もしかして彼女も、髪色のせいで人々から忌まれているのだろうか？

だとしたら、何て理不尽な世界。

彼女ほど綺麗な心を持っている人間は見たことがないのに。

「ところで、あなたの名前を聞いてもいい？わたしはエレシア」

「おいらはラタ。ラタ・トスク。分からないかもしれないけど、リスの【イティア】なんだ」

明るい茶の髪からのぞく、獣の耳。

それは確かにリスのものらしかった。

「やらなければならぬことがあって、おいらはリエスタ 竜
が続べる国から出てきた。代々、……の名を告ぐものの使命なんだ

「

最後のほうは声が小さくなって聞き取れなかった。
エレシアは不思議に思って尋ねようとしたが、ラタに遮られる。

「匿ってくれてありがとう。リエスタから出て、人間には冷たい扱
いばかり受けていたけど、エレシアだけは違った。本当に心から嬉
しかった。感謝してもしきれない。……でも、もう行かなきゃ」

思いつめたような目をしながら、ラタはベッドから降りる。

「何もお返しはできないけど、君のことは決して忘れないよ。さよ
うなら」

そう言って出て行くとしたラタの手を、エレシアは不意に掴ん
だ。

「待って！」

必死に留めるエレシアの手を振り払うことが出来ずに、ラタは困
ったように足を止めた。

しかしエレシアは尚もぎゅっと腕にすがりつく。

「待つて、ラタ。わたしの気持ちも伝えさせて」

こくりとラタが頷くと、エレシアは手の力を少し弱めた。
そしてゆっくりと息をつく。

「わたしも、嬉しかったの。髪色を褒めてもらえたことなんて、生まれ一度もなかったから……」

ましてや、心から感謝されたことなんて……、そう呟く声は、かすかに震えていた。

「わたし自身、人に拒絶されることを恐れて壁を作っていたのかもしれない。けれどラタ、あなたのおかげで、大切なことを思い出せた気がするの。人間、誰しも生まれつき知っていること。わたしはそれを忘れていた」

それは、心からの幸せな笑い方。

握る手に、力がこもる。

と同時に、彼女の瞳がラタを真摯に見つめた。

「わたし、あなたについて行きたい。外に出てみたい。あなたが何処へ何しに行くのか分からないけど、できればあなたの助けになりたいの」

「エレシア……」

とうに覚悟は出来ている様子だった。

ラタはいささか逡巡したのち、やっと口を開いた。

「エレシアが、おいらがすることの助けになるのはありえない。おいらの使命は自分自身だけのものだから。でも、外に出たいのならおいらが連れてってやる。エレシアがそう望むのなら」

エレシアは、ゆっくりと頷いた。そつと、ラタの手をとる。

「
連れて行って」

5 (後書き)

ちなみに、ラタの名前はとある神話のリスからとりましたWWW
(分かる人いるかな……)

びみよーにネタバレ？

ラタの使命とは一体なんなのでしょう！？
ヒント、それは王子たちに関係あります。

「連れて行って」

とくん。

そうエレシアに言われた瞬間、ラタは胸が高鳴るのを感じた。
思わず胸を押さえる。

(なんだろう、この感覚は……)

今まで感じたことのない感情。
それをなんと呼ぶのか、彼はまだ知らなかった。

ただ、彼女の笑顔が見たい。
そう思った。

「……エレシアの笑顔は、綺麗だ。おいらが今まで見たものの中で
一番」

思わず零れ落ちた、聞こえるか聞こえないかぐらいの声でそう呟くと、エレシアは驚いたように目を丸くした。

そして嘔吐す。

「そんなことを言われたのも初めてよ。もっと美しい人はたくさんいるでしょう？」

それでも一番だ、とラタは思った。

何故だろう、彼女だから、なのか。

「それよりラタ、いつここを出るの？」

エレシアの問いで思惟から引き戻されたラタは、少し考え込んだ。

「なるべく早く出発したいと思っているけど。でもエレシアも一緒にじゃあ、今日明日というわけにはいかないね。いろいろ準備もあるだろうし」

エレシアはここに帰ってくることを考えているのだろうか。

ここを本当に出る気であるなら、やることは山のようにあるだろう。

心に思いつくまで。

森の奥の小屋でひとりきりの生活。

辛いこともたくさんあっただろうが、新しい一步を踏み出すのは思いのほか勇気がいる。

ましてや家を捨てるのだ、思い出を断ち切るのは寂しくて悲しいことだ。

そんなことをラタが考えていると、エレシアが物言いたげにこちらを見ているのに気づいた。

エレシアは視線をさ迷わせてから、思い切ったように口を開く。

「……ラタは、動物と話ができる？」

思いがけない質問に、一瞬言葉に詰まった。慌てたようにエレシアは続ける。

「お別れを言いたい動物がいるの。もし解れば、と思ったのだけど出来ないのなら」

いいわ、と言おうとしたエレシアの声を、遠吠えが遮った。

腹の底に響くかと思われるほどそれは深く、大きい音だった。距離は近い。

はっとしたようにエレシアは外を見る。

「ウエル……」

その呟きに問うような眼差しをラタが送ると、エレシアは視線を戻して言った。

「その、わたしがお別れを言いたいって言った狼のことよ。わたしが小さいときから一緒にいてくれた。本当に、いつもいつも。わたしの家族みたいなものなの」

何処かやわらかい表情で、慈しむように笑む。

「きつと近くに来ているんだわ。ラタにも会ってほしい。賢いから決して噛み付いたりしないわ。狼だからって怯えないであげて」

誘うように首を傾げ、小屋を出て行くエレシアの後をラタは追う。

小屋を出て程なく、二人は狼の姿を見つけた。

銀褐色の毛並みに金の瞳。

堂々たるその姿は、獣の王者といっても差し支えない。

静かなその瞳をエレシアに向けると、ウエルはラタからエレシアを守るように二人の間に立ちはだかった。

エレシアはそんなウエルに諭すように語りかける。

「ウエル、ラタは敵じゃないわ。わたしは大丈夫だから」

ラタは黙ってウエルを見つめ続ける。少したってからゆっくりと口を開いた。

「……エレシア、もしかしてそれが例の狼？」

エレシアが頷くと、ラタは目を鋭くしてウエルを再び見た。

顔つきが心なしかきつくなっている。

そして言い放った。

「それは純粋な狼じゃない。おいらは気配で分かる」

はっとしたようにエレシアはウエルを見た。

ウエルが、純粋な狼じゃ、ない？

「どっぴいっことー!？」

「確かなことはいえない。けど、この気配は完全な狼のものではないよ。酷く曖昧だ。それにきくと、人の言葉も理解している」

目を細め、探るような目つきでウエルを見つめるラタは、先ほどの様子とは決定的に何か違った。

一気に大人びた雰囲気のエレシアは息を呑む。

「それでは、人の言葉を話すものの、完全に獣の存在【ソツァン】
だというの？」

「【ソツァン】でもない。似て非なるものだよ。おいらにも断言でき
ない」

6 (後書き)

ごめんなさい、中途半端で……。

続きは必ずすぐにつづるので、少々お待ちください……。

てか、ウエル君狼じゃない疑惑発生 W W W W

7 (前書き)

すぐ出すとかいったのに、遅くなってすみませんon
てかちょー短いし……

次から章タイトル変えたいと思いまっす

おいで、偉大な翼をもつ主【ティザルダ】に選ばれた愛し子。

お前は、自分のすべきことを分かっているね？

彼の主の魔より造られたお前の祖から脈々と受け継がれてきた使命。

それが今、お前の星の下にある。

お前は愛し子でもあるが、危ういほど穢れにも近いことを忘れてはいけないよ。

さあ手をお出し。お前に印を与えよう。

*
+
*
+
*
+
*
+
*
+

こくりと、ラタはのどをならした。

灰色狼を見、それから再びエレシアを見る。

胸にくすぶるこの思い。

そして、すんと何かが自分の中に落ちた。

（ ああなんだ、そういうことか ）

自分の使命は、目の前にあった。

もう自分は見つけていたんだ。

そう、王子たちの花嫁を捜し出すという使命を。

よくお聞き。

お前はきつと 外へ出たなら、その容姿ゆえひどい迫害を受けるだろう。

人間は異物を嫌うものだから。

けれど 竜愛でる姫 は違う。

きつとお前を受け入れる。

お前はその乙女を捜し出すのだ。

会えば必ず分かるよ、【ティザルダ】に選ばれた愛し子と姫は、
惹きあう運命にあるのだから。

しかし忘れてはいけない。

竜愛でる姫 はどちらかの王子の花嫁だということ。

何処かで気づいていたのかも知れない。
信じたくなかっただけで。

胸が苦しい。

これが「惹かれる」ということなのだろうか。

頭の中で警鐘が響く。

エレシアが 竜愛でる姫 だと。

王子の花嫁。

その人を探すのが、アリエスタ愛し子 の名を告ぐものの定め。

「ねえエレシア」

自分の声が震えているのは、気のせいだろうか？

エレシアは澄んだ蒼い瞳でこちらを見つめる。

馬鹿みたいに、また綺麗だと思った。

警戒したように灰色狼の金色の瞳がこちらをにらみつける。

「どっちら使命は見つかったみたい。おいらと一緒に来てくれる？」

たとえ自分が望まないことだとしても、それが使命であるならば。

自分はそれに従おう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6355w/>

涙華

2011年12月26日23時51分発行